
【恋色空模様】 Look of the sky! 【夢小説】

獅燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【恋色空模様】 Look of the sky! 【夢小説】

【Nコード】

N7370T

【作者名】

獅燕

【あらすじ】

伊東誠悟いとうせいごが本土かみなじまから神那島に來て数ヶ月。

季節は春から夏へと移り変わり、衣替えも始まった。

そして数日後に控える体育祭。

そんな中新しい転校生がやってくる…。

主人公について（前書き）

今作のオリジナル主人公についての記述です。

主人公について

名前…山城 徹《やましろ とおる》

職業…高校二年

得意教科は科学。逆に苦手教科は語学系。

英語は特に致命的で発音が日本語に近いものになっている。

神那島に来るきっかけとなったのが、従姉の父が研究途中に倒れてしまいその代わりに行って手伝ってこいという彼の親二人に言われたこと。

趣味は菓子作りと女の子な趣味を持っていて、他人に知られることを恥じている。

小さい頃、従姉の母の教えで簡単な護身術的なものと、ナイフ投げができる。

後者は実際に使ったことはないが、ナイフ程度の大きさのものなら大抵命中させることができるというどうでもいい能力。

序章

日が伸びてきた春と夏の間あたりの昼過ぎ。
本土から神那島にかけて架かる橋、神那島大橋を一台のタクシーが走っていた。

室内は空調機が付いて快適な温度を保っている。
このまま外に出れば暑いこと間違いなしだろう。

「……………むにゃ」

その快適な室内で寝る一人の少年、山城 徹やましろ とおるは訳あって神那島へ行くことになった。

訳、というのは数日前にさかのぼる……。

この話のきっかけは母の一言。

「未来ちゃんのお父さんが倒れちゃったんだって」

ちなみに『未来ちゃん』というのは俺の従姉に当たる人だ。
そして彼女の父親、過多かたさんは海洋科学の学者さんである。
その人が倒れたという報せがきたのだ。

「それは大変だ。未来ちゃん一人じゃ研究も捗らないだろうしねえ……………」

「そうよね……………。徹が手伝ってあげればいいんじゃない?」
「え?」

母がこういうことを言うのには理由がある。

俺は幼い頃、一時的に過多さんにお世話になった時期があり、その時に科学に興味を持って勉強を始めて今に至る。

得意教科は科学と言っても過言ではないくらいに好きだ。

「いやいやいや……。いくら何でも俺が行ったら迷惑かかるだろうし……」

「そういうと思ってすでに交渉してある」

「さすがお父さ〜ん」

ちよつと姿を消したからトイレにでも行ったのかと思った父は電話をしてきていたようだ。

油断も隙もない親である。そしてちよつとドヤ顔になるのもやめてくれ。

「お前が行っても大丈夫だそうだ。問題ない。とも言っていたな」

「さすが未来ちゃん」

「学校にも話を付けるから荷物まとめて待つてなさい」

「ちよ、ちよつと！俺の意見は！？」

「徹なら大丈夫よ〜、問題ないのよ〜？」

「いや、だからそういう問題ではなくてね？」

しばらく母に抗議してはみたものの、不思議と話は進んでいき……。

「ということで明後日向かってくれ。交通手段は――」

「はあ……」

もうこの時点で諦めはついていた。

現在通っている学校側もすぐに手続きをすと言っていたらしい。そして転校先の学校もそれと同じだ。

国も補助してくれるだろう。
理由はきつと……。

「過多さんの影響か……」

「……さん！……お客さん！」

「ふえ……？」

「着いたよ、お客さん」

「ああ……すいません、ありがとうございます」

「氣いつけてね！」

そう言うのとタクシーは颯爽と去ってしまう。

どこで降りたかと言うと……。

「おい、ちょっと待て。……ここどこだよ！？」

神那島大橋を渡って少し過ぎた辺り。

簡単に言うとな普通の道路で降ろされたのである。

到着とそれから（前書き）

何だか「」が多い気がします。

到着とそれから

神那島の天候は快晴。雲ひとつ見つからない。
そして何より暑い。

現在地は後ろを向けば神那島大橋、前と左右を見れば車ひとつ見つからない道路。

「……どうなってるか確認するか」

立ち止まっても意味がないからとりあえず親に電話。
数回コール音がした後……

「——ただいま留守にしているか……」

お決まりの留守番電話の音声アナウンス。
両親そろって留守電となると後は……

「未来さんに電話するしかないか……」

「呼んだ？」

「ひゃい!？」

「また可愛らしく驚くのねー」

「み、み、み、未来さん? いつから背後につ!？」

「今」

「はい？」

「い・ま。東京の若者風に言うところ……背後なう？」

「は、はあ……」

従姉、山城 未来《やましろ みらい》はこういう人だ。
昔から天真爛漫なところは変わってない。

それに毎度驚かされている俺もまた変わってない。

「……どっかに隠れてたんですか？」

「ちょーっと驚かそうと思って車に隠れてたんだけどねー？」

「だけど……？」

「全然来ないから寝ちゃってた♪」

そう言いながら「てへっ」とかやってくる。

何だろう、この苛立ちは。

「ってか、何でそんなに汗掻いてるの？汗っかきだっけ？」

「……あなたのせいで待たされてたんですよ。こんな暑い中」

「そんなことより！暑いから早く家に帰ろ？」

そんなことよりとか言ったよ、この人。

しかも暑いからって…今の話聞いていたのかすら怪しい。

「いいから早く乗ってー、暑いー」

「はいはい……」

未来さんの車——どこから湧いたのかは謎——に乗りおよそ30分。
目的地に到着。

「ここが徹の部屋ねー。ちなみに私の部屋は——」

そう言って説明をしてくれる未来さん。

家自体はそこまで広くなく、十二畳くらいの部屋が三つで二階建てだ。

「一通り説明したけど何かわからないところある？ あ、ちなみに

私の部屋に入る時は枕持ってきてね、枕」

「なぜ……？」

「来るとしたら寂しくて寝れない時でしょー？」

「何でそうなるんですか！ 行きませんよ！？」

「えー！ 来ないのー？ つまんなーい」

ダメだ。この人と話していると疲れてしまう。

今日は色々あって疲れたからもう寝たいところだ。

「はあ……。疲れたんで寝ていいですか……。？」

「いいよー？ じゃあ枕持ってきてー」

「だが、断る」

「早っ！ 昔は喜んで持ってきて一緒に寝たのに……。？」

「そんな記憶はありません！ おやすみなさい！」

「うん、おやすみ……。あ、そうだ。明日から学校だから」

「……は？」

明日は学校だそうだ。

それにしても……。早くない？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7370t/>

【恋色空模様】 Look of the sky! 【夢小説】

2011年10月9日05時01分発行